KAPPA NOVELS

長編連作アクション小説

偽装諜報員

大藪春彦

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編連作アクション小説　偽装諜報員　¥380

昭和43年2月1日　初版発行
昭和47年1月15日　31版発行

著者　大藪春彦
東京都世田谷区松原3-3-18

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（関川製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Haruhiko Ōyabu 1968

長編連作アクション小説

偽装諜報員

大藪春彦

カッパ・ノベルス

目次

潜行鯨作戦　5
亡命者奪取作戦　39
二重スパイ強奪作戦　75
原潜拿捕作戦　111
隠し金恐喝作戦　145
密書送達作戦　179
P・P・F本部乗っ取り作戦　215

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

イラストレーション　山野辺（やまのべ）　進（すすむ）

潜行鯨作戦

1

メーン・スタンドのむこうに、雪を頂いた四月の富士がそびえていた。矢吹貴は、富士スピードウエーの、きつい三十度バンクのついた第一コーナーの上の観客席で、ポケット・ウイスキーの壜を口に運びながら、ツーリング・カー・クラスの熱戦を見つめていた。

クラブ対抗のクラブマン・レースなので、観客は少ない。まともに吹きつけてくる須走おろしの寒風を避けるために、矢吹はコートの襟を深く立てていた。

その横には、矢吹がやっている〝株式速報〟のアルバイト学生寺本進がいた。矢吹は寺本にヤマハ・スポーツ・ツウイン二五〇の単車を与えて使い走りをさせている。

その寺本はモーター・スポーツ気狂いなので、今日の矢吹は寺本に誘われてレースを観戦に来たのだ。いわゆる〝街道レーサー〟に似ず、寺本のテクニックは確かなので、矢吹は今日は愛車レーシング・ミニ・クーパーの運転を寺本に任せていた。

追い風に煽られて、一・六リッター以上の出場車は、一・六キロのストレートの終わりで二百キロをはるかに越えていた。ほとんどスピードを落とさずに二〇〇Rの三十度バンクに突っこむ。

摺鉢状のバンクの上部にヤモリのようにへばりつきながら、斜めになって第二コーナーから第三コーナーの下りに駆け降りていく。力学上、バンクはストレートの延長であるうえに十パーセントという大きな下りなので、第三コーナー手前のブレーキング・ポイントではスカイラインGTレーシングなどでは車速は二百三十キロを越えている。

風に乗って運ばれてくるカストール・オイルの匂い、タイヤのゴムの焦げた匂いを矢吹は胸一杯に吸いこんだ。アルコールの手伝いもあって、のびのびとした気分になっている。

やっと薄汚ない諜報戦のジャングルから抜けだすことができたのだ。自由を取り戻すことができたのだ。もう、緊急電話で呼び戻されたり、吐き気を覚えるほどの緊張に耐え続けたりする必要はない。この手に握った拳銃で射たれた相手が、虫けらのように死んでいくのを見守ることもない。

レースはスカイラインGT群と、ベテラン田中健二郎が操るブルーバードSSSによってトップが争われてい

た。

圧倒的なパワーを誇るスカイラインGTの逃げこみを追撃する田中のテクニックは、ヘア・ピン・カーブに、S字ベンドに冴え渡り、ストレートで大きく引き離された差を縮めていく。

しかし、凄味のあるなすび色の田中のブルーバードも、三十周の最終ラップで力尽きた。ヘア・ピンを過ぎた登りでミッションが異音をたてると車の下からオイルの煙があがり、火煙をあげてコース脇にストップする。

砂子、大石、杉田のスカイライン群が、ほとんど一団となってチェッカー・フラッグをくぐった。しばらくしてベレットGTの浅岡や、ブルーバードSSSの長谷見、コロナSの蟹江、何周も遅れたコルチナ・ロータス、アルファ・ロメオGTA、ムスタングGTなどの外車群と一・三リッター以下の国産車やミニ・クーパーSなどがゴールに跳びこんでくる。脱落した車がコース脇に点々とすわりこんでいる。

順位とタイムが発表され、場内アナウンサーは、午後のスポーツ・カー・レースまで昼食をはさんで、一時間半の休憩時間があることを告げた。

矢吹は空になったホワイト・ホースのポケット壜をベンチの下に投げこんで立ち上がった。

「飯にしよう。それにしても、国産車のスピードは物凄いもんだな。レーシング・ミニが軽くひねられるのも無理はない」

「そうですね。何しろ二気筒のトヨタS八〇〇レーシングでさえ、この富士のストレートでは百八十キロを軽く越えるんですから……食堂に行きますか?」

「いや、車に用意してある。レストラン〝キュイジーヌ〟の子牛の腿だから、こんなところで食うよりましなはずだ。ボルドーの赤を持ってきた」

「いいですね」

寺本は明るい顔をさらに輝かせた。ポケットから矢吹のミニ・クーパーの鍵束を取り出し、それを振りまわしながらスタンドの通路をくだっていく。

二人は第一コーナー・スタンド裏の駐車場に出た。駐車場に車は少ない。

「先に車に入っていてくれ。食いものは、後ろのシートのバスケットのなかだ」

矢吹はトイレのほうに歩きながら言った。

「じゃあ、ヒーターで車内を暖めておきます」

寺本は三十メートルほど先の矢吹のミニのほうに向か

った。

矢吹はトイレで小用を済ませた。手を洗っていると、凄まじい爆風が襲いかかってきた。トイレのガラスが微塵に砕ける。一瞬後に爆発音が轟いた。爆発音は、矢吹がミニを駐めている方角から聞こえる。

矢吹は反射的に右足に手を走らせた。その途中で、もう自分は拳銃とは縁がなくなったことを思いだし、ポケットからダンヒルのライターを取り出す。

足につけるワルサー拳銃も、シガレット・ケース型拳銃も内閣情報室に返還した矢吹であったが、ライター兼用の手榴弾だけは紛失したと称して手放さないでいたのだ。

そいつを握りしめて、矢吹はトイレから跳び出した。

矢吹のミニがあったあたりのコンクリートに大きな孔があき、そのあたりに濃褐色の重い煙が流れていた。空に舞いあがっていたタイヤの一つが矢吹の近くに落下してくる。

煙のあとから、横倒しになったミニのエンジンとシャシーの残骸が姿を現わした。寺本の姿はない。十メートルほど離れたところに引っくりかえっているクラウンの下回りにべったりこびりついた血と肉片と髪が、寺本の体の一部であろう。

寺本は、ヒーターを入れるためにエンジンを掛けたのであろう。ところが、仕掛けられた爆弾がエンジン・スイッチと連結されてあったのだ。矢吹が吹っとばされなかったのは、まったく偶然のせいとしか言えない。

矢吹の唇のまわりは白っぽくなり、頬にはグリグリができている。咄嗟に頭に浮かんだのは、内閣情報室の裏切りであった。内閣情報室なら平気で約束を破ることぐらい何とも思わぬに決まっている。内閣情報室は、矢吹が抱えた核地雷の引き渡しの交換条件として、矢吹が内閣情報室から脱退しても、刺客を差し向けないことを約束したのだ。無論、矢吹は内閣情報室の破壊活動については一切他言しないことを約束させられた。

矢吹が内閣情報室の秘密登録リストから抹籍されてからもう三カ月が過ぎた。はじめは用心していた矢吹も、近ごろは暗闇から飛んでくる銃弾の幻想の怯えが去って、人並みの生活を楽しみはじめていたところなのだ。

しかし……と、矢吹は考える。内閣情報室だけを疑うわけにはいかない。杉山部長も言っていた。たとえ矢吹が内閣情報室をやめたところで、内閣情報室を敵とする組織は、決して矢吹のことを忘れることはないだろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

と。復讐のために、そして見せしめのためにも、矢吹の命を狙い続けるだろう、と……。

レース場の警備員や警官が駆けつけてきた。レース中の事故にそなえて待機していた救急車もサイレンを鳴らして駆けつけてくる。矢吹はライターを握りしめ続けていることに気付き、ウエストミンスターをくわえて火をつける。

2

矢吹が御殿場署の調べ室から帰宅を許されたのは真夜中になってからであった。寺本の母や兄弟が駆けつけていたが、矢吹も被害者であるから、彼らは矢吹に強いことを言えなかった。寺本に父はない。

それが矢吹にはかえって辛かった。とりあえず香典として身につけていた金のうちから十万円を寺本の母に渡し、近日中に慰労金と退職金として三百万円を渡すことを約束した。

貧しい寺本の母にとっては三百万円は夢のような金額であったらしい。悲しみの淵から、隠しようもない喜びが湧きあがってくる。矢吹に取りすがって感謝の言葉を並べたてるその老女を見ていると、矢吹は人間の卑小さと日本の貧しさに毎度ながら突き当たって、やりきれない気分になった。

署の前には、秘書の氏家由紀子が中古のコロナ・ハードトップで迎えにきていた。立てたコートの襟を左手で押え、裾を風に翻した矢吹が署の石段を降りてくると、瀟洒なクリーム色の車の横にたたずんでいた由紀子が跳びついてきた。

「馬鹿、馬鹿……死んでしまったのかと思ったわ」

と、泣きじゃくりながら、矢吹の胸に頬をこすりつけた。由紀子は矢吹が毎日死と顔を突きあわせた商売をやっていたことを知らない。疲れきってはいたが、矢吹のギャラントリーは消えてなかった。本場バーバリーのコートの前をひろげ、コートで由紀子を包むようにして細い体を抱きしめる。

「すまない。心配をかけて」

と、呟き、由紀子の顔を仰向かせる。

閉じた長く濃い睫が、スペインの扇のようであった。ふっくらとした唇が軽く開かれ、真珠の歯が覗いている。

矢吹はその由紀子に口づけした。はじめは冗談のよう

に軽く、次いで深く情熱的な口づけだ。右手は無意識のうちに、腰のツボを愛撫している。

男をまだ知らない由紀子の体は緊張で固くなった。しかし矢吹の接吻が深くなると、由紀子の口はかぐわしい匂いをたて、今にもすわりこみそうになる。矢吹は、その気にさえなれば、二人だけの世界と外界のあいだに透明なベールを張りめぐらすことができた。

しばらくして、由紀子は唇をもぎ離した。霞がかかったような瞳で矢吹を見上げたが、ニヤニヤ笑っている矢吹を見て急に魔法の呪縛が解けたらしく、矢吹を平手打ちしようとする。

しかし、コートごと抱きしめられているので、由紀子の腕は動かなかった。

「卑怯よ」

「恋に卑怯もクソもあるもんか。でも、君が俺にこんなに惚れてくれてたことは、はじめて知ったよ。危ない目にあったが、これで帳消しだ」

矢吹は普段のとぼけた口調を取り戻していた。

「知らない！　心配してあげて損したわ」

「いいから、いいから。君は素晴らしい。いい世話女房になれるぜ」

矢吹は笑いながら抱擁を解いた。由紀子の腕をとってコロナのほうに歩きだす。由紀子はまだ乾いていないので、形のいい足を引きずるようにして歩いた。

由紀子は運転席に腰を降ろしたが、助手席の矢吹から顔をそむけるようにして、エンジンを掛けようとしなかった。

「何を怒ってるんだい？　機嫌を直してくれよ」

矢吹はレモンの香りのする由紀子の髪に顔を埋め、溜息をついてみせながら、背後から羽交いじめにする。まだ成熟しきらない由紀子の乳房は大きくなかったが、弾力に富んでいる。

「どうして今まで結婚なさらなかったの？」

由紀子が呟いた。

乳首を愛撫する矢吹の手が一瞬とまった。君が好きだよ。俺の人生なんて、一寸先は闇なんだ。それなのに、俺のような子供が生まれて、俺のような苦しみを味わうことになったのでは哀れすぎる……と、口にまで出かかったが、口をついて出てきたのは、

「俺は女性にだけは完全主義者でね。君のように美しい女でないと駄目なんだ。ところが、美しいものほど、うつろいやすい」

「うまいことをおっしゃっても、結局は浮気者なのよ。大嫌い」
由紀子は首筋に走らせようとする矢吹の唇を逃れてエンジン・キーをひねった。矢吹は溜息をついてみせ、助手席のバック・レストを半分ほど後ろに倒して体を預けた。
コロナは自動ミッション付きであった。静かに走りだす。広々とした新道とまだ拡張されていない道が混じる国道二四六号線を東京に向かった。
真夜中ではあったが、長距離トラックの群れが唸りをあげてその山道を飛ばしている。コロナは次々に抜かれていった。
カー・ラジオから甘美なムード音楽が流れる車内で、矢吹はたて続けにタバコを吹かしていた。外の風は弱まっている。
「誰があんなひどいことを仕掛けたのか見当はついていらっしゃるの?」
由紀子が沈黙の重苦しさを破るように言った。トラックの群れが途切れ、黒いアスファルトが山腹の向こうに消えている。
「ああ。だけど、必ず見つけだすよ。償いをしてもらわないとな」
矢吹はタバコの煙と一緒に呟いた。
そのとき、背後から力強いスポーツ・エンジンの排気音が迫ってきた。コロナの横を黒塗りのアルファ・ロメオGTVが追い越していった。急角度にコロナの前に回りこむ。
由紀子は急ブレーキを踏んだ。アルファに乗っている二人の男は、防毒マスクで顔を隠している。
アルファの太いメガフォン・マフラーの横には、もう一本の細い排気管が突きだしていた。街なかで静かに走るためのマフラー・カット・イン用の排気管のようにも見える。
「危ない、止まれ。そっちのベンチレーターも閉じるんだ」
矢吹は左手で細目に開いた車窓ガラスを捲きあげ、右手でヒーター・スイッチを切った。左右の手でセカンダリーとメーンのベンチレーターを閉じる。
そのとき、アルファの細いほうの排気管から、おびただしい量の白煙が吹きだされた。高さ三メートル、幅は道一杯に煙はひろがっていく。アルファの姿は濃い煙の向こうに消えた。

ダッシュ・ボード右端のセカンダリー・ベンチレーターの一つを閉じることに気をとられ、由紀子はブレーキのほうが一瞬おろそかになった。コロナは煙のなかに急停車した結果になった。

「いかん。また走らせるんだ。煙から脱け出せ」

矢吹は叫んだ。

由紀子は瞳を引きつらせていた。震える足でアクセルを踏む。コロナはガクガクしながら動きだした。

「見えない。前が見えないわ！」

由紀子は喘いだ。アルファGTVは白煙を吹きだしながら前をのろのろと走っているらしい。矢吹はかつて横須賀街道で、DDTを噴射しながら走る駆虫車に追いついてひどい目にあったことを一瞬想いだしながら、

「よし。バックだ。バックで脱けだすんだ！」

と、命じた。

ブレーキを踏んだ由紀子は、セレクター・レバーをNに入れた。そのとき、ベンチレーターの隙間から白煙が車内に流れこんだ。無意識にその煙を吸った由紀子が胸を押え、ハンドルに胸をぶつけて崩折れる。クラクションが不吉な悲鳴をあげた。

矢吹はその由紀子を押しのけて運転席に移ろうとしたが、咄嗟に考えを変えた。左手で鼻を押え、右手に特殊ライターを抜きだして車の外に跳びだす。

途端に煙が目を刺した。激痛で目が見えなくなる。盲目になった矢吹は何とかして煙から逃れようとして走ったが、ついに息が続かなくなった。

煙を一口吸った途端、頭の芯が痺れた。急激に意識が薄れ、矢吹は丸木のように路面に転がった。

気がついたとき、頭は割れんばかりに痛み、胸には強い吐き気があった。それに、体が揺れているような気がする。矢吹は頭を振って無理やりに目を開いた。

手足は縛られてなかった。ミラノのツーラのものらしい山羊皮の肘掛け椅子に腰かけさせられている。脇のテーブルには、水差しとタバコと卓上ライターが乗っている。

目の前二メートルのあたりで、部屋はガラスで仕切られていた。特殊ガラスらしくその向こうは見透せない。

「痛むかね、矢吹君？」

右の壁についたスピーカーが英語をしゃべった。渋く落ち着いた中年男の声だ。

「寺本を殺したのは貴様だな？」

「あれは間違いだ。君も察しがついてるように、われわれが狙ったのは君だ」
「今度はどうして俺を殺さなかった？　なるほど、俺の口から何か訊きだそう、と言うわけか？　俺は何も知らない」
　言いながら、矢吹はさりげなくポケットをさぐった。ダンヒルは昏倒する時、無意識にポケットにしまったかもしれない。
「危ないライターはこっちに預かってある。遠慮なく、その卓上ライターを使いたまえ」
　男は言った。ガラスの向こうからは、マジック・ミラーのように、こっちの様子が丸見えらしい。
　矢吹の頭痛がさらに激しくなった。矢吹は額を揉みながら口のなかで罵る。
「痛むだろう。その水差しを使ったらいい。薬を溶かした水だ。すぐに楽になる……心配するなよ。君を殺そうと思えば、好きなように殺せたんだ」
　男は言った。
「……」
　矢吹は水差しからラッパ飲みした。目を閉じてじっとしていると、まず、胸の吐き気がとまり、次いで頭痛が嘘のように去った。
「楽になったようだな。それでは、さっきの質問に答えようか？　爆弾を仕掛けた時は君がどんな武器を身につけているかがわからなかった。だから、君に反撃されないように一思いに死んでもらおうと思ったわけだ。ところが、あの爆発で、君が飛び道具を身につけてないことがわかった。それで、君を生け捕りにしたわけだ。いろいろとしゃべってもらわないとならないからな」
「……」
　矢吹は唇を噛んだ。頭痛と吐気は鎮まったのに、体はまだかすかに揺れている。体だけでなくて、部屋も揺れている。船室らしい。
「君のライターが手榴弾となっていることもわかっていたよ。だから、毒ガスに、一時的に視力を失わす薬も混ぜたのだ」
「由紀子は？」
「丁重に保護してある。彼女が死ぬも生きるも、君の気持ちしだいだ。さあ、しゃべってくれるね」
　男は猫撫で声になった。
「何をしゃべればいい？」
「われわれの組織と活動について、内閣情報室はどの程

度探知しているのだ？」
「われわれ？　俺にはあんたたちが何者なのか見当もつかない。わかってたら、こんなぶざまなことになる前に寺本の仇をとってやれた」
　矢吹は特殊ガラスの仕切りを睨みつけた。
「内閣情報室にも人間の心が残っていたのか？　こいつは面白い。女を一緒に捕えたかいがあった」
「内閣情報室とは何のことだ？」
「君は度しがたい馬鹿なのか？　よろしい、面白いものを見せてやろう」
　男は笑った。
　ガラスの仕切りの真ん中が明るくなった。そしてそれがテレビのブラウン管のように由紀子の姿を写し出す。
　由紀子は素っ裸にされていた。細っそりと優美なその体は、電気椅子のようなものに縛りつけられている。膝を揃えた両足は自由だが、真っ正面に向いた乳房の下は椅子の背に、両腕は椅子の肘につながれ、椅子の下には電気のコードが這っている。
　由紀子の瞳は恐怖に吊りあがっていた。矢吹の部屋の左側のスピーカーにスイッチが入れられたらしく、由紀子の荒い呼吸音が生々しく流れ出た。

3

「それでは実験にかかる。君がどれぐらいのあいだ耐えられるかが見物だな」
　男は言った。
　同時に由紀子の体に電流が通された。
　由紀子は凄まじい悲鳴を絞りだした。全身が痙攣しはじめ、顔は醜く歪んで眼球は今にも眼窩からとびだしそうになる。血管が浮きあがった首は後ろに反り返り、両足は虚空を蹴って隠されていた部分が丸出しになる。乳首は電気アンマにかかったように震えた。悲鳴は絶叫から断末魔のけものような呻きに変わる。
「やめてくれ。犠牲者は寺本だけでたくさんだ！」
　矢吹は叫んだ。顔から脂汗が垂れている。
　由紀子に加えられていた電流が切られたらしい。由紀子の痙攣はやみ、全身から力が抜ける。失神したらしい。
「ああいう野暮なことは趣味に合わないんだが、君が強情を張るから嫌なことをやらなければならなかった。さあ、しゃべってくれ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo